

## 道普請人の活動に携わって

京都大学法学部3回生 水村紗英

単なる偶然の出会いが、思いもかけない幸福へとつながっていたり、人生の道を示してくれたりすることがある。私と「道普請人」との出会いは、まさに「偶然が呼んだ幸福」であったと、現地での活動を終えた今思う。

講義名に何となく興味を持ち履修した木村先生の授業。法学部の私にとって、土木関連の講義はなじみも薄かったが、それでも毎回受講したのは、自分の研究をただ自分だけのものとせず、国際貢献という形で社会に還元している姿勢に心を打たれたからである。聴講しているうちに道普請人にどんどん興味を持ち、実際に現地での活動を見てみたいと思ったのが、今回の現地ボランティアに参加したきっかけだった。

今回、道普請人の活動に参加したことを「幸福」であると感じるのは、私が今回の経験から多くを考え、大切なことを教えてもらうことができたからだ。「どんな場所でも笑顔はある」こと、そして「共に笑顔になること」の大切さ、この2つが、今回の経験で私が強く感じたことであった。

今回初めてアフリカ大陸を訪れるまで、私のアフリカに対するイメージは漠然としたものだった。貧困や未発達、原始的という言葉が浮かび、日本とは全く違う生活水準で暮らしているのだろうという想像しかできなかった。いわば、「ネガティブ」なイメージしか抱くことができなかったのだ。しかし、実際にケニアの地を踏み、そのイメージは180°変わった。確かに、日本にあってケニアにないものは、たくさんあった。ケニアの家庭には電気も水道も、車もパソコンもない。道路はでこぼこで、町中の市場も悪臭が立ちこめていた。しかし、そんなケニアで、「日本が失いつつあるもの」を発見することができた。それは「笑顔」だった。初めて出会う人誰もが笑顔で私を出迎えてくれ、何があっても”Don't worry.”と笑顔で励ましてくれた。それは単なる笑みではなく、生きることに對するエネルギーをたたえた笑顔、心からの笑顔だった。そんなホストマザーの笑顔に、毎回どんなに勇気づけられたことが知れない。フェイス・トゥ・フェイスの意思疎通と疎遠になった日本が失いつつあるものを、ケニアで見つけられたように感じた。

そんなケニア人の笑顔を見る度、「発展とは何なのだろう」と考えさせられた。今、「発展」は幸福追求のための重要な価値観になっている。「先進国」・「発展途上国」と国家を分類するのも、この価値観の表れだろう。発展途上国は発展するために邁進し、先進国も新たな発展を求め、このような現状に疑問を感じる瞬間が何度もあった。というのも、ケニアに生きる人々は、私の目には十分幸福に見えたからだ。物資はないが、彼らはその状況下でも最善の策を見つけだし、工夫し、人生を心から楽しんでいるように見えた。だからこそ、あのような生命力に溢れた笑顔になるのであろう。電気を通し、車を持つことは、確かに私たちの生活を便利にする。しかし、それが「幸せ」なのだろうか。それだけが「幸せ」のかたちなのだろうか。不便ではあるだろうが日々を楽しんで生きるケニアの人々を

見て、この国が、今まで先進国が取り入れてきたような「発展」の形をそのまま踏襲すべきなのか、考えさせられた。発展とは言っても様々な形があると思うから、自国に合った発展のかたちを吟味し、それを実行すべきなのではないだろうか。そして、私もそのかたちを自分なりに考え、伝えることができれば良いと考えている。

「共に笑顔になる」これが、今回道普請人の活動に、そして初めてボランティアという活動に携わって感じたことだ。こういうイメージを持たないようにと努めてはいたのだが、「ボランティア」という言葉は、どうしても「助けてあげる」というニュアンスを連想してしまう。しかし、今回の経験で、そのイメージは完全に払拭された。NGO というのは、対象とする地域や人々と繋がってこそ、成果を实らせることはできるということを手学んだからだ。多くの村を訪れて村の意見や要望を詳しく聞き、その上で「一緒に活動していく」道普請人の活動スタイルは、スタッフと村人との一体感を生み、信頼を構築する。それが波及し、世代と共に受け継がれ、地道な活動がやがて大きな達成へと繋がるのだ。一本の道が舗装されたことに伴って道沿いに幼稚園が作られ、20 人程の子供たちが学んでいる姿を見たとき、共に、寄り添って活動することが、より多くの笑顔を生むのだな、と実感した。たくさんの笑顔を生む道普請人の活動に感動し、私もその活動の一端を担うことができたことに感謝するとともに、私自身も、常に相手に寄り添い、共に笑顔になれるような人間になりたいと強く感じた。

今回の経験は、衝撃的であり感動的であり、たくさんのことを感じ考えた。多くの笑顔に出会い、私も笑顔になり、大切なことをたくさん教えてもらうことのできた2週間だった。どんな場所にも、自分を幸運へと導いてくれる偶然が存在する。日々心のアンテナを張り、些細な偶然も見落とさないように生きていきたい。そして、その偶然を繋ぎ、道普請人の活動のように多くの人と共に笑顔や幸福を作り出せるような自分になりたいと思う。

最後になりましたが、今回このような機会を提供していただいた木村教授、道普請人ケニア事務所・京都事務所の皆様、受け入れていただいた村人の皆様、本当にありがとうございました。